婦人と子ども

第四卷第十號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるへし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌丈け買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年十月二日印刷
同　年十月五日發行

不許復製

發行兼編輯者　東京市神田區西小川町一丁目一番地　有久龍一
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

大賣捌所　東京　東京堂●同東海信交合資會社●同北隆館

婦人と子ども第四卷第拾號目次

子ども

お隆さんの手柄……林　天　然……一
黑木大將と英吉利の子供……一五
英吉利の子供の恤兵……一六
さるとかゞみ……一七
てまりうた二つ……桑田良隆……一八
いそっぷの話……一八
考へもの三つ……近藤登喜子……二〇

婦人と子ども

賢夫良父の教育……牧　羊……二二
戰場の滿足……林　天　然……二六
ある夜音樂的の小集にものしてす　み　れ……二八
えびかづら……すみれ會……二九
フレーベル會俳句端書集……鹽野奇零……三二
信州の秋……小林雨峰……三三
冷水養生……三七
小兒の變死につきて……三八
子供のお守り……三九
貞一の日記……その　母……四〇
割烹……石井泰次郎……四四
家庭に於ける所感……飯塚忠次郎……四七
世界最高齡の婦人の死去……五〇
大阪みやげ
附市の幼稚園擴張方案、保育會等……東　牧　羊……五〇
二葉幼稚園の狀況……同園報告……六〇
新刊紹介（すみれ雜誌）……六七
會報……六七

婦人と子ども

第四卷第十號

お隆さんの手柄

林天然

少女お隆さんは、陸軍大尉國野爲也の長女であります。今年十歲で、尋常四年級になりました。十歲にしては、躰が大きく、色白く鼻隆く、眼涼しくて、な

かく品のよい綺麗な少女であります。其上、天性悧發で如何にも活潑でありまして、勢のよいことは、父親にも優って居る位、凧もあげれば輪も廻はし、投毬もすれば繩飛びもする、甚しきは樹に攀登って果實をもぎ、竹馬に乘って駈競もする。爲らないのは、相撲をとることと、水の中で泳ぐことだけである。でまた普通の女の兒のする人形遊びや、飯こっこなどは、極く嫌らしい。といって男の子のよーに亂暴なをは決して爲ない。ちょっと見ると、餘り元氣がよいから、輕卒よーであるが、よく道理を辨へて學校の方は精出して學びますから、いつも一番か二番 三番と下った例はない、平生他の女兒のよーに、ペチヤクチヤ饒舌らないが、いざといふ時には、立板に水の如く論じたてる。それから力

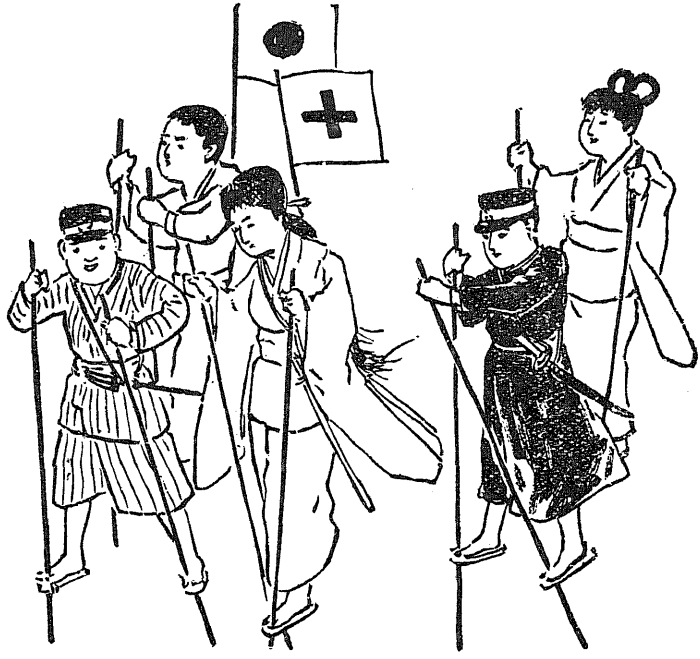
も強く、ある時男の生徒が女の生徒を虐めたといふので、運動場で男の生徒三人を取って投げたので、其大力を知らない者はない位であります。

日露戰爭が始まると、父の大尉は直ぐ出征の途に上ることになりました。お隆さんは悄げる所か、健げにも父に對ひ『お父さん、露西亞は日本の仇敵ですねえ、ほんとに憎いわ、大きな國をかさにきって、意地のわるいことばかりして。お父さん！、シッカリやって下さいな。お父さんのお名前は、國野爲也といふじゃありませんか、國の爲めなら、お父さんが戰死なすっても、妾泣きはしないの、ねえお父さん！露西亞の兵隊を逐ひまくって下さいな』といひましたから、大尉は大喜び『オーお前、よく言ふてくれた。

俺はキット露亞西の兵隊を逐ひまくって見せる』といって、勇みながら營所に赴きました。

お隆さんは、それから毎日、戰爭遊ばかりして居ります。で戰爭のことをば、少女に珍らしい程よく知ってる。やれ聯隊旗だの、やれ要塞司令官だの、やれ有阪砲だの、恤兵部だの、哨兵線だの、赤十字社だのと、口癖のよーに言ってる。而かも器用であって、旗を彩ったり、軍艦の形を切ったり、鐵砲を製えたりする。けれども有繋に女の兒だけで、帽子はかぶらない、旗も多くは赤十字の旗をもってゐるのです。

或日お隆さんは、劍をさげ旗をたて、二三人の少女を連れて、予の宅え遊びに來ました、予は平常お隆さんをば妹のよーにして



ゐるから、いつも揄揶ってやる。

『お隆さん！豪らいねえ。どーれ、お見せ其刀を、オーこれはよい刀だ、大將の持つ刀のよーだ。

『兄さん！今日の新聞讀みましたの。露亞西がまた負けて、ほんとに日本は強いのよ、お父さんは、もー何人位斬ったかしらん。滿州といふ所は、これから何の位遠いのですか

妾大きくなったら行きたいの、けれども妾は女だから……

『いやお隆さんは、實は男であったのだ。

『えッ、男で、妾が？

『そー男であったんですよ。だからお父さんがよく言ってた「お隆が男であったらば」って。ハハァそーですねえ、お隆さんが二歳の時でしたろー、それは〳〵寒い大雪降りの日、お母さんがお隆さんを抱いて、炬燵に入って、伯母さんと話をしてゐたのです、所が餘り火が強くて、お隆さんの睾丸が、トロリと熔けて、火の中に落ちてしまったんだ。さァ大變、お父さんが大こほしでしたがもー仕方がない、それからお隆さんは、女になったんです、だからお隆さんは、男の兒のよーに元氣がよい。ハ

ハハァ

『おやそー。妾また男になって戰爭に出たいわ、兄さん！、こんど東京え行ったら金の玉といふのを買ってきて頂戴！、妾それを腰にさげて男になるの。

『けども、金玉は價値が高いから、銀玉を買って來て上げよ。

『兄さん！銀でなくとも、銅でもよいの

『鐵砲玉なら一錢で五個。五個食べると飽きますねに。ハハハー

『鐵砲の丸なら、日本の兵隊さんに上げて、露亞西の兵隊を撃せたいわ。

お隆さんには、今年七歳になる弟があります。名は盛といって矢張り元氣がよい、軍歌を謠ふのと、喇叭を吹くのが上手です。

或日盛坊は、雷太郎、武、勇次郎などいふ、何れも七八歳の腕白輩を連れて來て

『姉さん！、一所に遊びに行こー。

『あァ行こー。お國さんもお出なさい、いつものよーに、盛ちゃんと雷ちゃんが陸軍、武ちゃんと勇ちゃんが海軍、お國さんと妾が赤十字社の看護婦になりましよー。よくって、そんなら直ぐ行きましよー、盛ちゃん！喇叭と空氣銃を持ってお出なさい。

それから六人の小混成隊は、無邪氣聲を揃ひ、軍歌を謠ひながら何處といふ的もなく、野原の方へと進みました、時に雷ちゃんといふ兒が、アっと起上り

『蛇が蛇が、大きな蛇が！、あァ怒ったく

『叩けっ、ぶんなぐれっ、殺しちまはっ！

『盛ちゃん、お止しってば、虫けらなんか、弱者を虐めたって、滿らないやァ、盛ちゃんは日本男子じゃないか、さァ喇叭を吹いて行きましょーよ

夫から、野中に行くと、種々な草が若葉を出し、菫菜、蒲英公、ニガナなど、所撰ばず咲き揃ふてゐる、小軍人共はこゝで列を亂して、草花の採集にかゝりました。で盛ちゃんは、犬の兒のよーに、獨りであちらこちらと驅け廻はり、野の眞中にある小さな森まで行き、フト上を見あげた所が、餘り高くもない樹の枝に、一羽の鳩が眠ってゐたので大喜び、直ぐ空氣銃を向けよーと思ったが、自分勝手に擊って外づれるといかぬから、ソット還り來て

『姉さん〳〵！大きな雀が、あァあそこに眠ってゐるの、僕がぶつから、早く丸を込めて下さい

『そんなら妾が撃つよ、お前には駄目よ、早く空氣銃をお貸しっ

『不可ない、僕がぶつのだ、僕が外づしたら、姉さんぶって！

『お前には、ぶたれ

やしない。妾がキット當て見せるよ。

いやだ、僕が見付けたんだから、僕がぶつのだ

『だから妾がぶったらお前に上げるよ、解らないねえ、早くお貸しってば

それでも弟の盛ちゃんは、自分でぶとーとして、空氣銃をやらん

から、姉はじれったがり、無理に取ろーとした。弟は遣るまいと防いだが、姉は姉だけ、弟をつきのけて、空氣銃を奪ひとりました。弟は漸と往生して、豆の丸を姉に渡した。姉のお隆さんは、直ぐ森の下まで走り行き、ソット樹の枝を見廻はすと、成程鳩が心よく眠てる、まァよくってと、大きな樹の幹に躰を隱し、靜に狙を定め、やがてポーンと打放しました。シメタ！鳩は兩翼をすくめて、ポタリと地上に落ちた、お隆さんは餘り巧くやったので、夢のよーな思ひをした、鳩は猶更夢のよーでしたろー。

ポーンといふ音がしたので、後に殘って居った小軍人共が、先を爭って來て見ると、お隆さんは既に鳩を取り上げてゐる

一姉さん萬歲！　姉さんー僕におくれ、ねえー

『あァ上げるとも、大きな鳥だろー

そー言ってゐるうちに、鳩が少し動き出した。一体鳩といふ鳥は、極く臆病で、少し傷を受けても落ちる、況して眠ってゐた時であったから、魂消て一時氣絶たのでしよー。そーして鳩が蘇生ったので、盛さんは嬉しがって躍り跳ね、小風呂敷に包んで、早く家へ歸りました。

『お母ちゃん！露西亞の兵隊生擒って來たァ。日本男子豪らいでしよー

『オヤまァ、これは〳〵、鳩をどこから貰って來たの、いゝことねえ

『いゝえ、お母さん、ほんとに妾がぶって擒えたのですよ。日本

女子豪らいでしよー。

『あァ豪らい豪らい。日本男子も豪らければ、日本女子も豪らい!!!

『萬歳!!!　大日本帝國萬歳!!!

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お隆さんと、盛さんは、鳩を飼って置て、親切に世話をいたしました。鳩はよくなれて、毎日可愛らしい聲で、デデッポッポー、デデッポッポー。ニホンカーツ、ニホンカーツと謠って居りますとさ。（おはり）

黒木大將と英國の小兒

鴨綠江の大戰爭からして、黒木大將の名は、全世界に轟き渡りましたが、わけて、英吉利では、大變に聞こえて居ます。其證據には、先日、英吉利のある子供から、次の樣な手紙を大將によこしましたといふことです、なんと可愛いゝじやありませんか、

親愛なる黒木大將閣下

私は八歲の英國の小供であります、閣下が鴨綠江で露兵をあんなに酷い目に合はせましたのを見て、大層喜んで居ります。英國の子供は、みんな日本の味方であります、私は日本の郵便切手と端書が欲しいのであります、父上の申しますには、私が閣下に手紙をさし上げてお願するならば、私に送って下さるでせうと、どうぞ、私のお願をおかなへ下さい

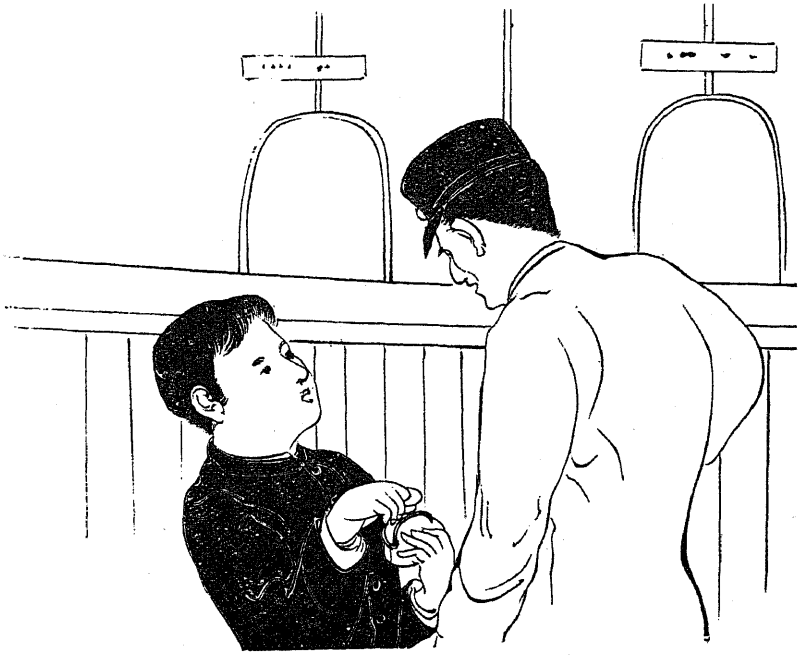
五月六日　エッセックス、イルフチルド、ノ

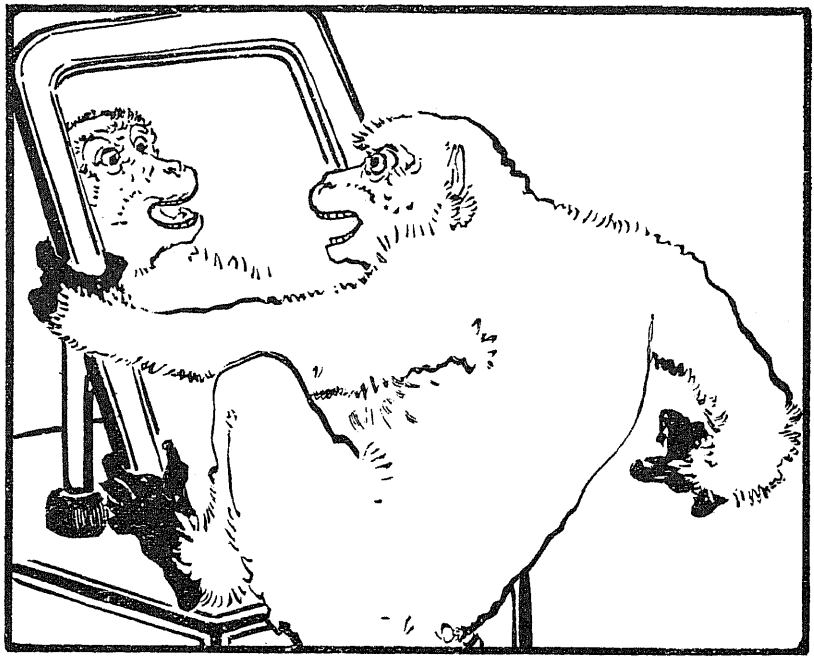
ースブルックロード五二番　エットキン、ホケン

あんなに、豪い大將も、この可愛い〻手紙をお喜びになつて、陣中でおとりになつた大將のお寫眞に手紙をそへて、其子供に送られたといふことであります。

英國の小兒の恤兵金

これは、ロンドンの新聞に出たお話ですが、或日英吉利のロンドン〻正金銀行へ、一人の英吉利の小供がやつて來て、「私は、小學校生徒の總代として來ました」といつて、金を十圓さし出して、「これは私兵が、日本の勇氣ある陸海軍の兵士に贈らうといつて、學校内で、一錢二錢づゝ集めたお金ですから、どうか、こちらから、日本の兵隊さん





へ届けて下さい」といつて出ましたので、銀行の支配人は大層感心して、厚く禮をいつて其お金に、右の事を手紙にかいて、すぐ、日本へ送つて來たといふことです。

さるとかゞみ

さるが、鏡にうつつた顔を自分の顔だとしらないで、はをむきだして、おこりますと、かゞみの顔もやっぱりおこります。おしまいに、つかみかゝりましたが、つかまりませんで、とうゝかゞみをなげだしました。

おひゝゝ、手まりを、もてあそぶべき時節

になりますから、手まりうた一つ二つお目にかけます、面白くはありませんが、どうぞ、うたつて見て下さい、そして、わるい所は直して下さい。

埼玉　桑田良隆

我が少女等（あの山に光るもの）は、の「ふし」にて

日の本の、うまし御國に、生れあひたる、少女等は〳〵。
師と親の、をしへ受けて、禮儀作法を、ただしく〳〵。
讀み書きの、みちも覺にて、ともに賢き、母となれ〳〵。
君のため、國の爲なり、はげめ女少等、たゆみなく〳〵。

孟母三遷

支那に名高き孟子の母は、世にも稀なる賢き人よ、寺の近所や市場に居ては、かわい我が子か毎日ひにち、佛事うりかひ夫れ等の遊び、ためにならずと學校のそばへ、家を移して住ゐし程に、子供ながらも夫より後は、禮儀作法や讀み書く事の、まねをしながら、終日遊ぶ、母はやう〳〵安堵の思ひ、かくも常々心をこめて、そだてたまひし其のかひありて、終に孟子は大賢人と、世々につたへて朽ちせぬほまれ、夫といふのも皆平生の、母の教の正しき故よ、これぞ世にいふ三遷の教なる。

いそっぷの話

狐と豹

狐と豹と行き遭つて、何方が美しいかといふので

甚く議論しました、處が、豹は、自分の皮について居るいろ〳〵の斑紋を一々狐に見せて、「どうだ奇麗だらう」といひますと、狐は澄し込んで、「然し、僕は身體にはそんな紋樣がない代りに、チャンと心に裝飾がある、だから、君より、餘程、美しいと思ふ」といひました。

獅子と兎

或時、兎が心地よく寢て居ると、大きな獅子がやつてきて、いきなり捕へて食べようとしました。處がそこへ丁度、一匹の牡鹿がやつて來たので、獅子は、眼つてる兎を捨てゝ置いて、すぐ鹿を追つかけました。兎は其音に目を覺まして、「オー危いことだつた」といつて逃げて行きました。すると獅子は、どうしても、鹿に追ひつくことができなかつたから、又元の處へもどつて、兎の御馳走にならうと思ひました。けども、兎はもう居りませなんだ。そこで、獅子は、「あゝ、これは不甘いことをした。餘計に取らうと思つた許りに、己の手に入つて居たものまで逃がして仕舞つた」と申しました。

獅子と熊と狐

或時山の中で獅子と熊とが一匹の山羊を取り合ひして、激しく爭つた末、二匹とも甚く怪俄をして、とう〳〵其場へ倒れて動けない位になりました。すると、一匹の狐が遠くに居て、さき程から、何度も行つたり來たりして見て居ましたが、二人とも全く疲れて倒れたのを見極めて、いきなりやつて來て、中央になつた山羊を嚙へて走つて行きました。獅子と熊とは夫を見ながら、追つかけることも出來ませんで、「何んのこつた馬鹿〳〵しい

丸で狐に御馳走してやる爲めに、二人で散々爭うて、骨折つたやうなもんじやないか」といひました。よく、一人の人が骨折つたものを、丸で、他の人に取られて仕舞ふことがあるものです。

狐と農夫

いつもいつも、狐がやつて來ては飼つてる鷄を捕つて行くので、或時のこと、とう〳〵係蹄をかけて、其狐を生擒りました。そこで、餘り惡いから、存分ひどい目に遇せてやらうといふので、其尻尾に、藁を一束結び付け、夫に油をかけて、火を燃やしました。すると、狐は死者狂ひになつて驅け廻はつて、やがて、其農夫の裏の畑に飛び込みました、丁度其時は、麥の時分でしたから、堪りません、畑中一面火になつて仕舞つて、可愛相に、其年は、丸で、麥を取ることが出來ませんでしたとさ。

盜賊と鷄

或晩、二三人の盜賊が他の家へ這入りましたが、何も取るものがなくつて、たつた牡鷄一羽を盜んで行きました。さて、棲家へ歸つてから、夫を殺さうとしますと、其牡鷄が申しまするには「どうか、命丈は助けて下さい、私は、大層人間樣の爲めになる鳥です、即ち、夜分、仕事をさせる爲に人間の目を覺させるので」すると、盜人等は、「夫だから尙更殺すのだ、なぜかといふと、お前が鳴いて家の人の目を覺ませるといふと、全く己らの仕事が出來ないもの」といひました、善人の味方は屹度惡人に憎まれます。

考へ物

三河西加茂筋生村　近藤登喜子

一　尻を踏むたび毎に頭を上げるもの　物品

二　一人りで持てばよいが二人りでは重くなり持ちにくゝ三人では尚持ちにくいものは（但シ重クテ目方増スニ非ラズ）　物品

三　或る者の先さに立たんとして先さ立つ事が出來がたく其れで其の者に遲れ樣として遲れる事が出來ませんこれ何んでしよう

英語と獨乙語

	英	獨
お母さん	Mather	Mutter
お父あん	Father	Vater
姉妹	Sister	Schweester
兄弟	Brother	Bruder
息子	Son	Sohn
娘	Daughter	Tochter
人	Man	Mann
家	House	Haus
本	Book	Buch
紙	Paper	Papier
水	Water	Wasser

私は本を持つて居ます

I have a book　（英）

Ich habe ein buch　（獨）

婦人と子ども

良夫賢父の教育

統計の上から見て、果して事實か否かは分らぬが、近來の新聞紙の傳ふる所に由ると、離婚の殆んど五割は女學生であつて、然かも其離婚の申出は何れも女子の方から出て居るといふのである。吾等は此記事を見て一汎の人、殊に教育の任にある人、及子女養育の任を負へる父母たるものに向つて、須らく愼重なる注意を促したいのである。

勿論、此記事には多少の懸價があると思ふ。多少針小棒大の筆法かも知れない。然しながら、丸つきりない事實を揑造して書いたものとも思はれない。否な今日の教育の有樣から考へて、確にあり得ること

ゝ思はれる。少くとも、將來に於て、之以上の事實の起り得ることは確に豫想せられるのである。して見ると、今日の教育に於ける缺陷と認むべき事柄は何であらうか、即ち、之等悲慘なる事實を結果した所の原因を究めて、之が救濟の方法を講ずるは頗る急務であるといはねばならぬ。

或人は、以上の事實を以て、新舊思想の衝突だといつた。極端なる新思想が注入するに走つた女子教育の弊害だといつた。而して女子教育の間違つて居ることを論じて、大に女子教育家の猛省を促がした。蓋し、今日の女子教育の趨勢に考へ及ぼす時は、確に之も一の原因と認められる。勿論教育といふものは、必らず、現代の開化、現今の時勢以上に理想を置いてかゝらねばならぬには違いないが、然も、同時に、現時代に適合する所のものでなければならぬのに、無闇と理想ばかり高くして、丸で、現代の時勢を馬鹿にしてかゝるといふ樣な思想を養成するものがあるとすれば、其結果は頗る危惧すべきである。理想は理想として高く持たせるのは無論必要であるが、然し、現代に於て種々實際上の事情のために、其理想を實現することは出來ないものだといふことも呑み込ませないで、矢鱈と新思想を鼓吹する時は、其理想はつまり空想となつて、世と調和することの出來ない頓狂な人間が出來るのである、時勢と調和させることを考へないで、無闇に極端な思想を注入する弊は大に注意しなければならないのであつて、我が女子教育界の一部には或は此の傾向のあることも亦事實かも知れない。然しながら、たゞ現在の時勢と調和させるといふこと許りを考へて居ては、丸で進歩といふものがなくなる、發達といふことは望

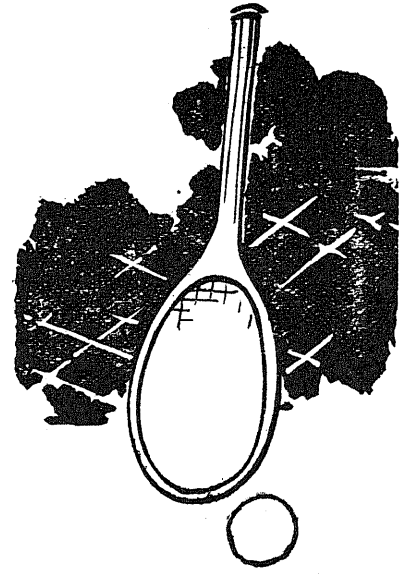
めない、改良といふことも期し難い、時代が、全く完全なものならば知らず、今日の時代に於ては、進歩、發達、改良といふ必要は頗る大なのであつて見れば、矢張、新らしい思想は絶えず注入して行かねばならぬ、教育といふことは、夫れ自身、進歩といふことである。

故に、たゞ新舊思想の衝突だといひ、新思想注入の弊だといつて仕舞つては、此事實を解釋するに、餘りに皮想であらう。今少し根本的に考を費すべき餘地があるではあるまいか。

吾人は屢々、人から、日本の教育は跛である、男子丈けが頗る高い教育を受けて居つて女子の教育は遙に後れて居る、之では國の進歩、社會の發達はとても出來るものでないといふことを聞いた。然し、今日、吾人の見る所に由ると、跛は跛だが、寧ろ反對の跛になつて來ては居ないかと考へる、前には右の足の方が長かつたのが、今度は反つて左の足の方が長くなつて居はしまいか、詳にいふと、今日の思想の上の教育は、女子の方丈けが進んで行つて反つて男子が之に伴はない。而して、男子教育の任にある人も、社會の人も一汎に之を認めて居ないのではないか、尙之を細しく言ふと、我國の女子教育は、專ら良妻賢母の養成を以て目的として居る。然るに、現今の男子の教育に於て、吾人は未だ、妻に對する義務を教ふるのを聞かないのである。未だ父としての責務を教ふるを聞かないのである。語を簡にして言ふと、女子には偏に賢母良妻を以て期し、事々に之を以て責むるにも係はらず、一方に於て所謂賢父良夫の語に一言も及ぼさないといふのは、怪事殆ど之に過ぎるものはあるまい。

眞個の良妻賢母たらんがためには、相當の教育を受け相當の思想の進歩發達を要する。然るに男子の教育に於ては、以て之に配するに足る丈けの良夫として、賢父としての思想の發達を遂げしむることを計らないで、たゞ自然の發達に放任して居るのみである。從つて、彼等は矢張り奴隷的服從といふ舊思想一派の考を以て之に臨むのである。普通の場合に於て、上中流の家庭の腐敗は多くは女性に對する男子の德義心の缺乏から原因して居る。此の如き場合に於て、女性の之に耐へ得る力は、寧ろ思想の發達しない者の方が遙に強いからして、か樣な男子に配するには、矢張、今日の女性では不可ないのである。以上の見地から見て、多くの中には勿論近代の思想とかけ離れた突飛な教育を施して居るのもあらうけども、大體からいふ時は、何も女子に極端な新思想を吹き込んで、夫がためにも離婚の悲慘が多いといはうよりも、寧ろ、男子の思想が、現今の開化よりも遙に後れて居るのであつて、女性に對する男子の貞操、子に對する父としての責務を十分に自覺せしむることが、頗る急務でなければならぬ、女子の思想が新しいのでなくつて、寧ろ男子の思想がまだ〳〵餘程時代後れであるので、此點に關して吾人は女子教育者に猛省を促すよりは、寧ろ男子教育の任に當るものが、宜しく大に三省しなければならぬ所だと思ふ。

（牧　羊）



戰場の滿足

林天然

一

天穹高く星滿ちて
　烟霞は靉く木の間なる
篝火影はうすらひて
　駒は蹄に土をかき
狼吼へて物凄く
　四望闃たる荒野原
こゝは何處か遼東の
　王師の屯す野營なり
天邊仰ぎて吟じつる
　年猶若き士官あり
櫛風沐雨しかすがに
　顏やつれて黑けれど
劍を案じてたてる時
　鬼神のそれに髣髴たり

二

世にます人は多けれど
　憂を知らぬはわれのみか
父と母とは打ちそろひ
　兄も妹もすこやかに

妻子なき身ののどけくて
心にかゝる雲はなし
出征の令は下りたり
益良武夫の本懷に
譽を的に戰ひて
萬世不朽の名をあげむ
われを送れる諸人よ
屍を野邊に曝さずば
錦を飾りて還らむと
誓ひし心忘れやは。

三

世界の歴史に我國の
御稜威をあげむ世あらむと
臥薪嘗膽十餘年
刀を研ぎて腕を練り
待ちに待ちたる甲斐ありて
ねがひかなふは敵露西亞
自ら誇る大軍も
人の恐るゝ暴兵も
縱横無盡に蹴ちらして
神州男子の膽みせむ
故里人は鶴首して
われの勳功を期し居ると
君と父兄と友の爲め
奮ひ起たんは我身かな

四

ふりさけみれば冴々と
月は東の山の端
隈なく彼所てらせるも
故郷の空を眺むれば

見ゆるは幽に星ばかり
三五の月よいざとはむ
何をしたまふ我母は
まだ起きつらむかいぬらむか
明日をも知らぬ露の身の
うたふも此世の名殘りにと
拔けば玉散る日本刀
月に閃めく秋水か
血潮沸ぎれる眼には
豺狼の敵もあらなしや。

五

折しも響く喇叭の音
暫しまどろむ兵士の
夢を破りて呼びたてぬ
强き士官は時なりと
故郷の方に打ちむかひ
さらば兩親はらからよ
雄々しくわれは戰ひて
かはる勳功を立てゝみむ
武運拙く死するとも
魂は翔りて東なる
皇國の櫻に宿とりて
花に色香を添なむと
腕をふりつゝ濶歩して
たち出でたるぞ勇ましき。』

ある夜音樂的の小集會に
ものして
友はいくたり
すみれ
絃の音に

かよへるまこと　美しく
調べもたかき　甲斐が嶺の
軒端の松に　月すゞし

五人むたり　其がなかの
中のひとりは　五とせか
六とせむかしゆ　いとはしの
なさけもおばれ　友にこそ

えびかづら（甲府魚町二丁目小林酔軒方すみれ會詩稿）　むら子

其の里に遊びてみつも甲斐がねの
葡萄の露にまた歸りこし

八千草の中の一つをとりてむと　みつ子

立ちよる袖のその露をかし　いま子

いさゝかの風をたよりに舞ひて來し
小蝶とまれよ野の葡萄かげ　春子

夕暮の葡萄の園をさまよへば
夏に知られぬかぜかをりけり　しら桃

山かげにひとりさびしき狀見せて
誰をまつらむか白百合の花　鶴子

さゝ舟に乘ぐむと川の邊に立てば
たちしばかりに涼しかりけり　みどり

夕立の過ぎしみ空を眺むれば

いつかはいめく月唯だ白し　撫子

しばらくを咲きてしはるゝ朝顏の
はかなき花の幸またいづこ　みぎは

えびかづら幸もたはゝに繁みけり
暫ー歌ひみむ月の下かげ　さくら

夕暮の一人靜かに月みては
神のみ言をまた繰りかへす　いよ子

さびしさを訪ふ人まれの山寺の
鐘の響きの今日亦た暮れぬ　靜子

あなたふと國のためとや死を笑ふ

三十

花の譽れの益良雄たふと　こま子

雨ゆきし庭のわやめの露の葉に
暫しはやどる夏の夜の月　さだ子

あかときを見渡す限り紅の
血に染めてけり滿洲の原　秋子

ふる郷にまだ見ぬ島のしまぐを
急がぬ夕べまたたのしけり
曉を旅出の人の笠の上に
よべの名殘の露ちりかゝる　梨子

ゆたかなる葡萄のかげに友呼びて
語るはなにかみ軍さの花

○　つれた

遠つふやのおやや植えけむ山梨の
　岡べゆたけし其のえびかづら。
みづ〳〵し葡萄葉かげに光みちて
　詩神奏づらしこと平和の譜。
小さき規の嘆つ世ならじ此の秋ゆ
　葡萄片野に人をし待たむ。
ひと房とぶだうに足りてひと日我が
　邦をおもふの友と語らまし。
つらかりし別れよさては曉を
　葡萄のかげに星透しみつ。

フレーベル會俳句端書集

一、課題　夷講、鉢叩、水仙、山茶花、千鳥、各二句宛

一、〆切　十月二十五日限り

一、披露　十二月發行本誌文苑欄

一、賞品　天地人三座には美景を呈す

一、撰者　當分本會の撰とす

一、投稿　本誌購讀者は何人にても投吟することを得用紙は可成繪端書に限り（眞筆刷物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第三回俳句端書集

落栗や汲まぬ古井を覗く人　長野　飯塚　曉籟

祝捷に新酒一斗の小村かな　同

撞き捨てる鐘に寂あり秋の夕　同
松風や水の上行く秋の色　仙台　立花　一瓢
落鮎や舟底きしる隱れ岩　同
富士の根を辷る夕日や稻の花　同
湖に捨てた樣なり后の月　同
美しく世を隱れけり菊の主　同
鹿啼くや小倉の山の夕月夜　武州　桑田日本子
聞く方にやがてうつるや秋の聲　同
名の知れて見力のある角力哉　同
番小屋に假寢の夢や鹿の聲　沖繩　上地まかと
日當りに所も更へす秋の蝶　同
朝雨に半ば伏しけり女郎花　同
月と露抱えて萩の白さかな　神奈川　樂天堂學洋
蔓引けば隣も動く糸瓜かな　同
重さうに風の動かす糸瓜かな　東京　久米　辰子

長き夜や宵から雨の同じ音　同
秋雨やつく〳〵と子のほしうなる　同
氷屋の芋屋と化けて秋の風　可
落しけり神に誓ひし水ながら　同
討死の遺骨屆きぬ秋の暮　陸奥　花松　曉星
歸省して笛の稽古や夕納涼　丹波　廣野　奇骨
出來稻に又も編足す俵かな　丹波　八木　可笑
朝顏の種取る庭や赤蜻蛉　同
夕榮や土堤を境に赤蜻蛉　神奈川　星野　秋月
秋風や半ば沒した艦の旗　秩父　青葉　高歲
花賣や花に似た子のしほらしき　同
今はねた小豆の莢や秋夏き　埼玉　月田　一甫
笑はるゝ瓢を種に殘しけり　同
忠助と名も言ひさうな草人哉　神奈川　杉崎　雲濤
進軍の後ろにしたり雲の峰　同

子子の浮きつ沈みつ旅順港　同

萬歳の聲に晴れけり朝の霧　大阪　内田　樵夫

夕月や青田万頃水満々　同

三光

人、籠城に宵々淋し虫の聲　陸奥　花松　曉星

地、富士の根を辷る夕日や稲の花　仙台　立花　一瓢

天、消えかゝる露に香の立つ黄菊哉　東京　樂天堂學洋

追加

無一庵奇零

力なき扇の骨や秋暑し

物訪へば吠えつく犬や秋の暮

貸家の庭や秋立つ草の丈

行秋や片足折れしきりぐ〳〵す

夏痩に男泣かせて靨かな

落城の跡寒げなり秋の風

戰止みし屍の上や月の雁

信州の秋

小林雨峰

（一）

熊ケ谷の土手の櫻葉大方は枯れて、蠹ばみたるが、飄々と亂れ散りぬ。秩父の山を見るに、山の頂は一刷毛さつとはきたるが如く、山の腰より下は深き靄にてぼかさる。天上の雲は霽れんとして霽れず、猶ほ雨を含み、彼處は白く、此處は灰色に、さては鼠色の濃さを交えて、雲脚ところ〴〵繁し。

高崎に來れば、老媼老爺の一群にて、一室は溢れん斗りの人込みとなれり、寸の餘地だもなし。思へば今日は彼岸の中日なり、皺くちやの老婆、

便所に往きけるに、席は早や既に他の人に占められたれば、身の措く處なく、我が友の膝の上に、撞と腰掛け、何知ぬ顔なるも可笑し。我が側らの四十五六の肥てうの年増、これも席なくてわが膝の上を占めて平氣なものなり。而も襟頸のあたりに腫物の出來て、其の臭氣汗の香と和して鼻につく、行儀のわろさを云はんかたなし。

嗚呼これを善光寺詣での善男善女とす。

瀘車横川につく頃、妙義の嶮嶽、奇峭峻嶂、鬼面の如く聳てるを見る。やがて碓氷の隧道に入るなり、われ往年の『寒山落木』の文を想起す。

熊の平に小憩して輕井澤にと着けど、冷風一面の溝を渡りて、さわ〳〵として聲あり、これ眞に秋の聲なり。淺間の山目のあたりに峙つ、曾つて藤村が詠ぜし『寂寥』の歌を誦す。

はるかに洗む雲の外、
これは信濃の空高く、
今も烈しき火の柱、
雨なす石を降しては、
み空を焦す灰けぶり、
神ゆめさめし天地の、
開けそめにし昔より、
常世につもる白雪は、
今も無間の谷の底、
湧きてあふるゝ紅の、
血潮の池を目に見ては、
布引にすむはやぶさも、
翼をかへす淺間山、

小諸より地は平らかとなれり。蕎麥の花は畑より畑に山際より山際に、斜に横に白き波紋を描きぬ、玉蜀黍、黎の畑、桑隴稻圃、稀には粟の穗實りて見ゆ。

小諸より山を迎ふるに總てこれ變化多し。遠きもの近きもの離れては去り、切りてまた離る。屋代をすぎて全山皆な一塊の山を爲せるあり、其の

麓をすぎて、榊と云ふあり、姨捨はあれなりと南の方を指す老爺あり き。

水は布引岩の傍を流る、曲々幾變移し、奇狀は恰も大蛇の蜿蜒蔔ふに似たり、隱れては見え、見えてまた隱る、

篠の井に着きたるとき、左手に西條山、右手に茶臼山を仰ぐ、昔時信越の兩雄、干弋相見えしの地、今僅かに一撮土の荒土を剩すのみ。殘山剩水一片の紀念碑に過ぎざるもうたてし。

稻荷山より濕車を捨てゝ棧道を躋る、路危く高し、人車通ぜず、戛々として步す。突坂を越ゆれば遙かに群山の蓬々として脚下に集まり來るものあり。重疊たる峰巒の背らにまた曲屏の如きもの峙つ。更らに登り登りゆけば、四面皆高峰低巒、凸また凹、大なるもの小なるもの、山と山との間時には稻田の敷物の如きがほの見ゆ、黃なる波を打てり。山腹の茅屋、山麓の炊煙、時に或は巖角に、或は藪陰に、人の住めるわるを見る。住めば都に勝るの味あるなるべし。

日の暮るゝ頃ひ、棧道を高く低く、深く遠く、幾くねり〳〵りして、更府村に入る。我友古堂の住る處なり、眺は三方に開け、山色愈奇幻の狀を齎らす。翠影漸く變じて紫色加はり、薄さは次第に濃し、日の暮るゝに近きてなるべし。雲は時々飛舞して、簷角を掠む、彼の山と此の山と相對せるものは笑語せるが如し、合せる雲は忽ち別れ、別れて去るものは涙ぐめる處女の如く、離れしものゝ合せるは喜を帶べる小兒の如し。崖下を流るゝは犀川なり、鞳鞳として轟き、遠く流れて遠雷の如くに響きぬ。川中島に至りて千曲川に合すと

なり。俯視すれば匹練の如く、山の袂を縫ふてゆく、雲煙、川流、峰巒、人家、悉く畫中のもの。

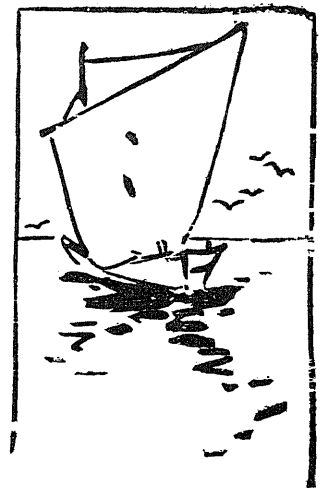
（九月廿三日）

今日は久米路橋の奇勝を探るべく出で立つ。

埋れ木はなかむしばむといふめれば
久米路の橋は心してゆけ

と『拾遺集』にあるはこれなり、一里あまりの山道を辿れるなり。楢、榛、くさ〳〵の茂みを分けて犀川の邊に出づ、兩岸の怪石奇巖、累々相峙ち、水は號々として巖石を嚙む。其の碎くるものは玉霰を散して白は愈白く。其の澄みて淵を爲すものは藍を揉みたるが如くに碧愈碧なり。凄絶奇絶、橋あり兩岸に架す。向ひの岸に着けば一巖高く聳えて、松蘿之を纏ふ、小亭あり全岸の景勝を占む。『秋風落木』なる長篇の詩成る、委曲はそれに讓れり。

刈萱、釣鐘草、女郎花、萩、桔梗、撫子、鳳仙花、薊、蓬、野菊、嫁菜の類、其他名も知れぬ、秋の草花　いひしれぬ香に醉ふて異郷また異郷の客たるを忘れぬ。（廿五日）



冷水養生

冷水養生法の身體健康の上に特効は、まことに明なことですが、東京府師範學校長瀧澤菊太郎先生は、夫につきて次の如くに記されました。

余が年來唱ふる冷水養生法は、衞生上世人の豫想せざる偉効あることを確信す、時正に之れを始むる好氣節なるを以て、之れが勸誘を試みんとす。今や我が國民は、男女を問はず、長幼を論ぜず、各其職とする所に依りて大に奮勵し、大日本帝國の爲に盡さざるべからざる千載一遇の時に遭遇せり、此の時に當り、大に國家の爲に盡さんと欲せば、先づ身體の健全を圖らざるべからざるや論なきなり、身體を健全にする法、固より枚擧に遑あらずと雖も簡易無費にして男女老幼を問はず、僅少の時間を以て容易に行ふを得て、而かも偉効ある方法は、冷水養生法に比すべきもの殆んど他になかるべきを信ず。今左に斯道大家の證言せられたる該法に關する効果の大要を述べんに、

第一、冷水養生法は、皮膚に最も適當なる刺激物にして、血管の機能の活潑ならしめ、血液の運行を盛にし、且つ皮膚を鞏固にし、感冒を豫防する効あり。

第二、此の法は、食慾を進め、消化力を盛にする

効あり。

第三、此の法は新陳代謝の機能を盛にす、即ち炭酸瓦斯の發生排泄を增し、酸素の攝取を盛ならしむる効あり、之れ實驗的に證明せられたる事實なり。

第四、此の法は、神經系の官能を强くし、精神を爽快ならしめ、忍耐力を增し、奮發心を起し、其の他注意力及び記憶力を增進する効あり。

第五、此の法の能く筋力を增し、疲勞に對する抵抗力を高むる効ある事は、是れ亦實驗的に證明せられたる事實なり

第六、此の法を實行する者は、嚴冬風雪の間を快然濶步する勇に富み、嚴寒にも火燵を擁するが如き怠惰心を生ずることなく、又薄衣寒に堪へ、手を懷にし或は之れを「ポッケット」中に投ずるが如き醜態をなさず。

第七、此の法は便通を調へ、又頭部の充血を除き上衝を鎭降して、精神を快活安靜ならしむ、冷水養生法の効果は、其の大略を述ぶるも猶期くの如く著しきものなるが故に、之れを繼續實行する時は、此等の諸効果綜合して、大に身體の健康を增進すべきは、理の覩易き所なり。

兒童の變死

につきて、三重縣では、左記の通りの調査をして各郡市長に通牒したとの事です。

三重縣警察部の調査に依れば三十三年より三十五年に至る三ヶ年間に於ける變死人中誤て非命死を遂げたる者百八十人中約五分の三は十二歳未滿の幼童にして學齡中に屬する兒童尠から

ず、此等の死因は別表の通り、顚倒、墜落、溺水若は瀛車に觸れたる者等にして、畢竟注意疎慢なるに依るものなれども、元來斯種災害は各自相當の注意を懈らざれば未然に防遏し得べきに付、平素學校に於て兒童の自愼自重の習慣を涵養し、可成危險の場所に近かよらしめず、又父兄談話會等に際し、臨機其保護者に訓諭を加ふる等、精々人生の不幸を減少するの方策を講ぜんことを過日同縣內務部長より各郡市長に通牒せり、今左に其の統計を記さんに、

十二歲未滿

原因	男	女	計
遊戲の際溜壺に轉落	一〇	四	一四
遊戲又は通行の際溜壺に轉落	一三	七	二〇
遊戲の際溝渠に轉落	五	三	八
遊戲又は通行の際河中に轉落	一一	一一	二二
遊戲又は通行の際井中に轉落	一	六	七
遊戲又は漁獵の際海中に轉落	四	一	五
水泳の際溺れて	一六	—	一六
鐵道線路に於て遊戲又は通行の際瀛車に觸れて（但し一名は負傷に止まる）	四	—	四
高所より轉落して	一	—	一

まことに、必要な注意でありまして、殊に、交通往來の盛な都會では、父母たるものは、一層の注意を要すべきであります。

子供の守り

につきて、注意すべきことだといつて、故の外山文學博士の姉に當られる方の話されましたに、

「牛乳の罎を守りの懷に入れさせて、其乳首を負ぶさつた子供にくはへさせながら、外に出す、暫

くすると、牛乳が空になつて、子供は切りに飲みたがつて泣く、するとお守りは、面倒くさいからいきなり、途中で、其空罎に水を入れて飲ませるのを見た事がある。第一子供に水を飲ませるのが既に不都合で、まして性の知れない水に於ては尙更、夫に懷の温みで夏などは殊更、乳首なり、ゴム管の中が腐敗物がついて居るかも知れぬ、以上は、まことに危險な事だから、餘程注意しなければならぬ。夫から、子供を遊ばし居中に、例令ば椽から落ちる、或は水溜に落ちる、歸つて明白地に主人にいふと、叱られるから、默つて宜い加減にいつて置く、所が、夫が打ち所が惡かつたり又は水が耳の中などに這入つて居た爲に暫くすると飛んでもない大疾ひになることがある」といふのです。

一體、子守りやばあやなどが、万一子供につきて誤をした時に、甚く叱つたりするのはよくありませぬ。夫が爲めに、遂には、何事も判然いはないで、隱したてをする樣になります。過は誰しもある事で仕方がありませぬから、そんな時には叱らないで柔にいつて聞かさねばなりませぬ。固より故意にするよふな者は、之は論外で、そんな者は始から雇はないのが宜しいのです。

貞一の日記（抜萃承前）

（明治卅六年五月卅一日生男兒）

その母

八月廿八日　父は玩具のステッヨ、貞一は衣紋竿にて、大皷を叩き居りしに、やがて父の持てる、ステッキをも與へよとて、之を取り、兩手にステッキと衣紋竿を持ち、得意氣に獨りで叩きて遊ぶ

おもゆ　四回　乳　晝三回　夜一回

午前四時起き　午後七時半眠る　晝寢二時間

八月卅一日　粥を喰る時、ふと茶碗の繪に、心づき、一口喰べては、エー〳〵と云ひながら、繪を指ざす、繪は六歌仙を赤く畫きたるものなり、午後より母に抱かれて、車に乘り、父は自轉車にて、神田一ツ橋通の、東氏を訪ふ、玄關へ入るや否出で迎へられし夫人は、修善寺にて、御世話になりし方なれば、喜びて直ちに抱かれたり、家は初めての所なれど、人はおなじみ故、大喜びにてはひまわる、二階の楷段を見つけ、直にあがらんとす、庭の方を見せて、花々といへば、そこにありし、朝顏の鉢を、指ざす、

歸途田中氏を訪ふ、可愛らしき猫あり、貞一大聲を出してよろこび、猫とたわむれては、猫の眼をつきに行く、猫はまた爪を出して引きかく、引搔かれて、變な顏をしては手をひつこませ、またしばらくしてはわすれてからかふ、

桂の霜(二椀)二回、かゆ一(一椀)二回、乳二回、

午前四時起き、午後七時眠る、晝寢一時間

九月二日　朝庭に出で、空を見上げ、有明の月の影淡く、殘れるを見て、エー〳〵と指ざすそろ〳〵乳をやめんとて、母學校へ行く前に、飲ませしと、歸りて飲ませしと、夜に入りて眠る時に、飲ませしとをやめ夜半の分は飲ます事に今日より定めたり、朝は無事にすぎ、午後母學校より歸り來りしに、例の如くよろこびて抱きつくや否や直に懷をわけしに、乳首に赤く寶丹のぬられしを見て、變な顏をしてながめ居しが、こわさうにちよいとなめて見、直ぐやめて情無い樣な顏をし

て泣く、それより時々手を乳の傍へ出せば、からい〳〵いや〳〵と首をふりて見すれば、自分も首を振つて手を引きこめてしまふ。

夕飯後、父とたわむれ居りしが、ねむくなりしか兩手にて時々眼をこすりながらも、母の傍へは來ず、機嫌よく遊ぶ、余りねむそう故、母抱きとりて、室内をあるきまわりしも、なか〳〵ねむらず、父代りて試みしもねず、また母抱きて臥床にねかせ、母傍に臥して、子守唄をうたひしに、ウツラ〳〵としながら、手を乳の傍に出す故、からいよといへは引きこめて、余り可愛想なれば、貞一の兩手を重ねて、母の頰にあてさせ、母の片手にておさへ、片手にて、こもりつけしに、十分ばかりたちてすや〳〵とねむる、

桂の霜(二椀)二回　かゆ(一椀)三回　玉子湯一回

午前五時起き　午後八時眠る　晝寢一時間

九月四日　今日はじめて、ランプを見て、あつく〳〵といふ、三あし四あし、ヒヨロ〳〵とあるき手をとつてやれば、一間位ずん〳〵あるく、今夜は夜半に飲む乳をもやめんと、桂の霜を用意して置き、さめし時飲ましても、乳はしと泣く、父起き出でゝ、かやの外にて、いろ〳〵すかしながら、眠らせんとしても、中々ねむらず、大聲にて泣き叫ぶ故、まだ物欲しき故ならんと、玉子湯をのませ、二時間あまり、手をつくして、こもりしもいねず、余り急に、やめてゝと、おもひかへし、とう〳〵乳をのませば、ちよつと飲みしばかりにてぐう〳〵ねてしまふ、

かゆ　五回　桂の霜　一回

午前六時起き、午後七時眠る、

九月八日　遼陽占領の祝捷として、毎日提灯行列あり、今日は下谷徒士町有志七百名の催しあり、母に抱かれ桶屋の横にて見物す、赤き提灯を見てよろこぶ、夜に入りて、父母に伴はれ市中の賑を見に行く、電車の中混雜して空席なし、漸くにして母と貞一は席を得、父は其の前にぶらさがりて立つ、暫時にして、前の方に空席出來し故、父其の方に行かんとせしに、心細く思ひしか、手を伸ばして泣く、傍に職人体の男あり、ソンナ弱い事ではいけないね、父さんが戰地へ行つたらどうしますと戲る、

九月十一日　父母につれられ本郷の松下氏を訪ふ佛檀にありし鐘を拜借しよろこんでたゝく、また美しき旗をいたゞく、歸途馬上の伯父さん所へより、時計を拜借し、伯父様貞一の耳の傍へ時計をあてゝ、聽かせてくださると、自分も時計を耳の傍へ持ち行かんとしては、通りこして肩にかつく様な事をして、皆様を笑はせる、其中ねむくなり其儘横になつて眠つてしまふ、

▲露國の神去る　露都の中央ポゴロヂトツキイ寺院に安置してあるカザン聖母の神像いつの間にか無くなつた、全國民の信仰して居る神像であつたから之れ神が露國を見捨て給ふたのだと斷食して祈るやら神の審判の日が來たと家財を賣拂つて妻子を山奥へ送るやら大騒ぎ

割烹

石井泰次郎

此度も先のつゞきをと思へど、夫よりも用に手近くたつ方がよろしからんとて、勝手口より、實習の二三を記しておきつ、軍國多事の際なれば十二ヶ月の順序によらぬ怠は、つぎのことゝなしつ

○左の實習は、前に記したるも有らんかなれども、其一場の手續なればかさねても記すことゝなしたるもわるべし

○栗どうふの拵方

豆腐と、栗と、葛粉と、醤油と、砂糖と、生姜とを用意して、さて豆腐を四角に切て、二寸四方に厚樣六分以上に切るべく、玉子燒なべに、油を敷て、兩面より黃色になるほどやいて、夫を水にとり入れて、油氣をとりて、酒、醤油にてざつと煮で《たゞ燒て油氣をとりたるを湯煮少ししたるまでにてもよし》椀にもりて、上より葛だまり《つくり方は次に記す》を、生姜の皮をむき、おろしたるを布に包みてしぼりたる汁を煉まぜて、豆腐の上よりかくる、

豆腐のよく、煮えてふくれたる時に、汁氣を切るやうに取あげて、茶碗の中に盛て、其上へ葛溜をかくるなり

扨又其上へ、栗の粉をぱら〳〵とかけて出すべし

栗の粉のつくり方は二つあり、一は燒栗をあらく粉にして、焙爐にてあぶりておきて用ふる仕方なり、一は栗を湯煮して、尾馬篩にて裏漉して（能く湯煮してよくくだきて、うらごしすべし、漉たる粉を用ふるなり○何れも栗の皮を去りて、甘皮をむきて後に燒もゆでもすべし

葛溜の拵方

これは、あんどうふとて、豆腐を二寸四方、あつさ八分以上に切りて湯煮して、あんをかくる仕方あり、葛溜のつくりかた左の如し

葛粉をくだきて粉となし、又は片栗粉を代用してもよし、水一合うちばを加へて、器の中にてとかし、上にうきたる塵をすくひさり、又しづめおくべし、

扨鍋に水を入れ、醬油、砂糖、鹽とを合せて汁をつくるべし、

汁の出來たる時（まづ水四合とすれば、醬油を五勺、水の能くわきたる所へ入れ、其まゝ搔めぐらすべし、次に砂糖を入匁入れ、次に鹽四匁内を入るゝなり、さて汁のあぢを見て、醬油あましと思はゞ二勺ほど入るべし、又再び味をこゝろみて、醬油を二勺入るべし○醬油の濃きものにて右の分量なり、薄ければ倍にもなることあり、

かくて、左の方に、ときたる葛の器を持ち、右手に杓子をとりて、左の手よりくずを鍋につぎ入るゝ、右の方にてひらなく搔めぐらす、といふ工合になすべし

とうふを皿にもりて、右のあんをかけ、其上へ栗を焙碌にていりたるを、ぱら〳〵とふりて出す

ことあり、これを、あんどうぶ、といひなせり

○今出川とうふの拵方

すましに、燒どうふを入れ、上置てすりせうがをふきて出すを、今出川とよべるなり、とうふを玉子燒なべにて兩面黃色にやいて、水の中にとり入れ、直にとりあげ、酒一合、醬油三勺にて氣ながく煮て、皿にとりて、上にすり生姜をおいて出すをも今出川といふなり

○くづしとうふの拵方

豆腐小二つを布に包みてしぼりて、鍋の湯に入れて湯煮して、汁をきりて、鍋にごまの油を入れていりとうふとなし、菜のこま〳〵に切たるを加へてなほいりて、醬油五勺、砂糖四匁をいれて煮あぐるなり

○うきどうふの拵方

豆腐を其まゝ湯の鍋に入れて湯煮して、金杓子にてすくひ、湯を切て、茶わんにもりて、上より味噌をかけて、青のりの粉にしたるをかけて、から し少しそへて出すべし。

味噌の拵方は、京都白味噌をすりて、馬尾篩にて木杓子にてこして、味噌六十匁なれば、水七匁位にてとくべし、砂糖六匁いれて、ねりて《とろ火にてねるべし》右の茶わんの中のとうふにかくるなり

○とうふの天ぷら拵方

豆腐を水を切りて、器に入れて、木杓子にてつきくづして、かたくり粉よき品を入れまぜ合せて、油をわかしたる鍋に、木杓子にてすくひ入れてさしわたし二寸位はゞ少しつまるほどの大きさ（但形はきまりなし、みだれがたにてよし）にしてあ

げてよし、大根おろし、薄醬油そへて出す、其割合豆腐の量、七十匁に、かたくり粉、二十五匁にてよし。

家庭に於ける所感（承前）

長野縣　飯塚忠次郎

一寸例を引いて御話し致さうなら、世間幾多の母親は自分の不注意は皆なたなにあげて『うちの子供のらんぼうで、云ふことをきかないのにはこまります』と、來客の婦人達なぞに愚痴のやうな愛相のやうな事をいふてをいでゝあるが、自分の子の行爲がわるいとゝとりながらも、之がたんせいに心を用ひなさらぬようだ、自分の子供の惡い方にむくのを知つてゐながら、しらぬふうをよそをゝてをらるるのは、あまり無責任では御座いませんですか、又母親の態度としてそれでよろしいものでしようか、それでは實に子供こそとんださいなんで御座います、來客婦人達の方でも『よう御座いますは、おこさん方はれあばれになるやうでなくては、いけませんです』なぞと、如何にも一寸さくと耳ざわりがよく道理の樣にも思へられるが僕の考へではよしやわるい氣でいふたのでなくとも、多少物事のわかつた婦人が其樣な事を口に出すのは最も惡いことであろうと考へる、もし其樣な談話中に小兒が居たらどうでせうか、『おばさんがあゝいふのだもの、搆うもんか』といふかもしれぬ、此樣なことをいふのは子供の惡習を增進させるのみで、却てその火のてを盛んにさせる樣なもので御座います、數多い中とて綿密なる觀察力と周到なる深慮とを具備してゐられる婦人ばかり

とも限らないから、大抵は其良否を考へないで口からでまかせたゞ小兒のきにいるような事ばかりいふてゐられる傾きもある、來客婦人の罪もまた大ではありませんか、偖てそれから斯る場合に於ける母親の態度はといふと笑を集めてきいてゐると云ふ始末實に驚くにたへないのです、斯の如き婦人此樣な母親は世間にはあまり珍らしくはないので、かやうな愚痴を云はれる御妻君、母親は御自身では左程に意に介せずに、それでよいあたりまへだと思ふてゐられるかしらねど、それがそもそも御自分のたりない、云はゞ輕卒な無責任な不注意なることを公然と人の前で布告する樣なものです、こんな習慣で今日まで此樣な事をしたり云ふたりする内に小兒は段々きかなくなる、終には悲いことには强迫的教育を行はなければならぬようになつてくるのはあきらかで、こんな教へをうけた小兒がどう致して善良な美しい品性と人格に進むことができましようや、如何で御座ますか、歸する所は母たる人の罪が多いかと存じます、こゝをみてもかへすがへすもゆるかせにしてはなりませぬ。

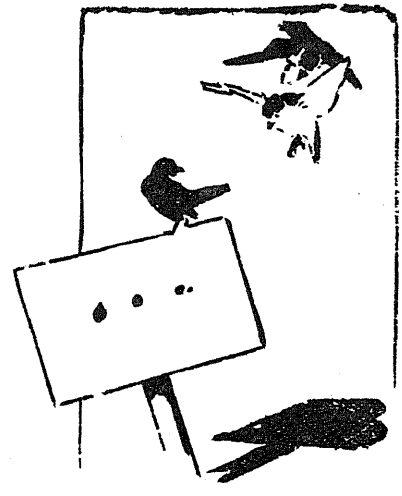
何故に子供は父親の命令禁止に服從するかそれは嚴格であまり口やかましくないからである、之に反して母親は口やかましいばかりか見付次第、手當次第、方便主義一點張りを以てするからです、たとへ家事に多忙だとはいへ先に命令禁止した事を後になつてゆるしてみたり、前に命令禁止しなかつたことを急にいひつけてみたり、それはそれは殆ど秩序と云ふものがない謂ゆる混亂的であるからです、ロックといふ教育家のいつたことがあ

る、『子供には成たけ守らせなければならぬだけの規則を與へて簡單に過ぎても煩雜に過ぎてもならぬ』とそれから又ボルマンといふ學者は『一般に父の命ずることは母の命ずることよりも子供が從ふものである、その理由は父の命ずることは簡單であるが母は饒舌り過ぎるからであらう』と、これ一理ある說であります、地体母親の御饒舌は兎角其見識を下げるもので、言の少い方がどことなくおくゆかしく見える、小兒はガミガミ云ふたからとて決して服從するものではない、適切なる敎育と嚴格なる態度がなくてはだめである。父親や母親は申すまでもないが家人も共に命令禁止の意が同一でなければなりません、そうでないと父親の命令禁止した事を母親がゆるしてみたり母親がゆるして置いた事を父親が禁止したりすると、なかにたつた子供は大にこまる、どちらに從つて善ひやらわからなくなりますのみか未だ完全に發育せぬ幼稚な腦に一つの大疑問を與へると終には不治の病を惹起する基となりますゆへ、餘程注意が肝要で御座います、命令禁止をするには決して虛言を吐いてはなりませんです、普通多くの家庭でまいまいみかけることで『おとなにしないとをまはりさんが來るの、狐がたべにくるの』とそれは色々な事を一時の方便からしていふは最もわるいことでこの樣なさゝいなことでも後になつて子供の發育をさまたげることがすくなくないのは事實であります、そんな事はあろふはずがないので御座いますからついに巡査も來なければ狐もこない、子供の智識が未だそれ程にまで發達しない幼稚な時代なら幾分か云ふことをきくかもしれ

んが、をいをい發育して、いまゝでのことがうそであると悟つたわかつきにはもうなにをいふたからとてきくものでないことはめにみえてるお話でとうとう子供も見樣みまねで虚言はわるいことゝ知りつゝも吐く樣になる、之は丁度親達が虚言のお手本を示す樣なものですからよくよく注意して命令禁止を執行せねばなりません（未完）

世界最高齢婦人の死去

去る八月六日亞米利加ミードビルの郊外ケルタウンにて死去せるマーフヒー夫人といへるは、其年實に百三十四歳なりし由なるが同人は千七百七十年クリスマス當日アイルランドに生れ、一百歳の時に渡米せしものなりしと云ふ。



大阪みやげ（つゞき）

東牧羊

島の市街　曰く中の島、曰く堂島、曰く松島、曰く江の子島、大阪には實に島といふものが多い否な大阪全市は全く島から出來て居るといつて宜い、淀川を中心として、縱横十文字に通じた溝渠は、橋から橋を渡つて往來すべく出來て居て、從

つて橋の立派なものも東京に比して遙に多いのである。

市の發達　もと〳〵商業地として日本一の都會たる大阪は、近來更に工業地として日本一の都會となつた。そして市の膨脹力の速なことは驚くべきで、彼の西區の新街と稱する遊廓は、德川の時代には西の一番の端れであつたのが、今は市の量中央となつて居る、夫から同區の松島といふ遊廓も全じく明治の初年に出來た時は、西の端れの片田舍であつたのが、今では矢張、一等繁華の中央の地となつたのでも分る、そして、今日では彼の築港が、西の海岸に出來つゝあるので、二三年以來、此附近に新らしい市街の新に出來た事は、夥しいものだ、つまり、市の膨脹は西へ〳〵と進んで居るが、此勢で進んで行くと、今に十年も經つた曉には、海上に幾多の新市街が出來るに違ない、而してこれは强ち空想でないことは確だ、人口も今では凡そ百万に近いが、これも十年前から見ると、殆んど二倍の增加だといつてよいしかし、大阪の

市街の狹い事　は有名な話で、人力車は三臺とは并べない。勿論馬車などの通行はとても〳〵、從つて大阪中で、馬車といふものは、たつた一臺政府（府廳のこと）にあるつきりだと聞ては、聊か情ない心地がする、尤も、今に、各停車場を連絡する電車が出來るといふこと、何にしても市區改正が當市目下の急務らしい。しかし、此道路の狹隘はやがては、彼の縱横に貫通せる溝渠に由つて其缺を補つて居るので、つまり大阪の繁昌の原因は陸よりも水の上にあるのだらう。從つて、築港

るか、淀川の改修（幅八町）といふ樣な非常の大工事に、當市が全力を注いでゐるのも無理はない。

大阪府女子師範學校　之は南の端れ、桃山に在つて、卅三年四月に開校したもので、現校長は大村芳樹君、温厚篤實、良校長として名聲嘖々たり現在生徒は本科に百二十人、乙種講習科に四十人合して百六十人ある、生徒の訓練につきては校長舍監はいろ〳〵骨折つて居られる樣であるが、こゝに一つ注意すべきことは、何處の女學校でも外出の時には必らず、外出簿といふものを持たせて行つた先きで、何時着何時發といふ印を押して貰つて、歸校の上、之を舍監に見せることになつて居る。之につきては、教育者間に於て、いろ〳〵非難のあることを聞いた。夫はこういふものは、何の益にもならぬもので、反つて生徒を疑つてるといふ感じを生徒に持たせるものだなどゝいつて居る、然し、どういふものか、どこの女學校に於てもやつて居るが、此學校に於ては、斷然、夫は用ゐないで、外出の時はたゞ、自分で備付の外出簿に、行先、用向、出舍の時到を記入して、歸つてまた歸舍の時到を記入する丈けにして居る。

寄宿舍は隨分裕かで廣い、中々清潔でよく行き届いて居る、が、女生徒の寄宿舍としては、今少し室内の裝飾に心を用ゐさせてはどうであらうか、男子の寄宿舍でも、漸く其無味乾燥なのを認めた今日、女子に於ては尙更其必要があるではあるまいかと思はれた。一體に我國の寄宿舍生活をする者は、とかく、こう云ふ方面に心を用ゐる餘裕がなさ過ぎはしまいか、而して、そういふ方面に心を用ゐさせて行くよふに躾ける事は、いろ〳〵の

點から考へて、必要であるまいかと思はれたのである。

音樂會　大阪の人といへば、單に實利以外に趣味を有たないといふ考は、少くとも近來に於ては間違つて居る。音樂などの趣味嬉好は、近頃になつて餘程發達したといふをで、既に本年に入つて三四回の音樂會が、彼の中の島の公會堂で開催された。一度は、清水谷の高等女學校生徒の催しで何しろ三千人は悠に這入る程の公會堂は、當時殆んど立錐の地なきまでの大盛會であつて、切符の賣上高は純利千圓といふでは、堂々たる東京の音樂學校の催しも瞠若の感があらう。も一つは、當女子師範學校の催で、之は見た所、夫程の盛會とは行かなかつて、從つて純利益も數百圓だつたとの事だか、然も、音樂會としての成効は、遙に前者に勝つたといふこと、夫から近縣の師範、高等女學校の音樂教員たる所謂專門家のもあつたが、之は比較的成効しなかつたといふことである。

愛珠幼稚園　これが、確に又市の一名物である全國に於て、一幼稚園に八万七千圓からの金を支出した所は他には決してない。然も、夫が、僅々二十ケ町餘の組合から支出せられたのである。從つて、建物として、頗る完全で立派なもので、又職員の思想も、他から比べると餘程進歩して居る樣で、尙、こゝの園長の鹽野吉兵衞君といつたら一体此町の名望ある商人であるに係らず、教育、殊に幼兒保育に付きては非常な熱心なものだ。もと〳〵此幼稚園は明治十三年に開設せられたので夫に付き面白い歴史もあるが、夫は玆に略して置く、兎に角、これ程の幼稚園は全國に殆んど見る

事が出來なからう。そして、保育料は一名に付き二十錢、幼兒は目下百八十もあらうか、目下は主席保姆が缺員であるが、若し適當な保姆があらば五十圓までは出すといつて居る。併も、今に之に應ずる篤志家もなくつて其人を得ないといふに至つては、吾はたゞ、保育界のために長歎せざるを得ないのである。一體、大阪といふ所は、教育、殊に幼兒保育につきては頗る熱心で、此點につきては、東京の冷淡なるとは丸で正反對である。事の序に、左に

市内幼稚園擴張方法調査委員會

の議事を左に引かう、全國幼稚園界の好個の參考にもならうかと思つて、

三十七年七月十二日正午より西區東江幼稚園に於て

一大阪市内幼稚園擴張方法調査委員會を開く出席するもの左の如し

天野　松二君　　小笠原松枝君
牧野　順學君　　岡本　アイ君
膳　タケ君　　加茂　仁八君
清水常次郎君

協議に入る

委員長を互選し清水君當撰す

小笠原君。經濟上より又保育上より觀察して、幼稚園を普通のものと、簡易幼稚園、即ち前日の保育科樣のものと二種となし、市内各町に多數設置するを得策とすゝし。

牧野君。小學校負擔區に小公園一ケ所を設け、之に所要の幼稚園二個乃至三個を置き、保姆は

一家の主婦の如き考を以て朝も夕も時々適宜に幼兒を會集して保育したし、即天然的幼稚園を造らんと欲す、但是予の理想にして即時實行せんとするに非す、漸次其設置を望むのみ。

加茂君。予は尋常小學校生徒數の三分の二を幼稚園に收容するの標準を以て、幼稚園を設備せんとす、自分關係の幼稚園に之を實行せんとして、却て教育實務者に妨げられたり。但現時行ひ易しと思惟するは午前午後二部保育是なり。

牧野君。予も實行の方法としては二部教授なりと信ず、西區にありては今其實行の手續き中に屬せり。

膳君。參考までに京都柳池幼稚園のことを言はん、同園は甲組の保育室に在るとき、乙組は遊戯室に在り、斯く交互室を轉換するを以て三保育室より六組の幼兒を收容し得るなり、

岡本君。我園時々之を實行す。

天野君。戰後經營に於て義務教育年限の延長は必然起るべき問題なり、幼稚園擴張を言ふもの須らく顧慮すべし。

清水君。義務教育年限に二年を增すと、滿六年以前に幼稚園に二三年保育すると、其教育の効果していづれか優れるか、予は完全に保育事業を行ひ得るものとすれば、後者を以て前者に勝れりとなすなり。

加茂君。將來の理想と、目下實行し得ること、分ちて協議せん、

委員長、先づ實行し得るものに付て說を述べられよ。

△堂島、清水谷、各高等女學校に育保科を設置

する樣建議のを、

可決

△府立師範學校に（男子）幼兒保育に關する學科を置く樣建議するを

可決

△午前午後二部保育のを

可決

△保育室轉換のを

可決

△市保育會に於て左の二事業を營むを

甲保育科の高き幼稚園を設置する事

乙貧民幼稚園即ち幼兒附託所を設置するを、

（但總會に附議し可決の上は更に其方法を調査するを）

△小學校令施行細則中幼稚園幼兒の定員百名

（除外は百五十名）とある制限を廢する樣文部大臣へ建議のを

可決

△兼務園長に月手當を支給する樣當局者へ建議のを

可決

△學校幼稚園の連絡に付提携して其方法を調査する樣大阪市教育會へ交渉すること

可決

委員長、更に希望として本會の意思を公表する件に付て協議を望む

△小公園を各負擔區に造り其所に幼稚園を設置すること

可決

△一小學校負擔區に一幼稚園を設くるの習慣を

打破し、其兒童の多少を量り相應の幼稚園を增設するを。

可決

△幼稚園を學校より分離獨立せしむるを、

可決

右各項委員長より會長へ報告し夫是其手續きを了する樣求むる事。

大阪市に又、

保育會

がある、京都、及神戸と聯合して時々聯合保育會を開き機關雜誌を年二回出す。當市保育會長は、大村芳樹君で、頗る會のために盡力せられ、會員も亦熱心で、中々活氣があり、市の有力なる教育機關である、本年五月、此會に於て、文部省及高等教育會議に向つて左の建議書を差出した。

建議會

大阪市保育會長大村芳樹謹みて文部大臣閣下に呈す我邦文運日に隆昌を極め幼稚園の如きも各府縣概ね其設立を見ざることなく既に全國に於て園數二百五十有三保姆數六百六十有五名を數ふるに至れり而して其成績に就きては時に多少の疑を抱くものありと雖も是主として保姆其人を得るに難きによる抑も現今保姆の待遇は小學校教員の如くならず隨ひて良好の人を得ざるのみならず會々此職にあるものも去りて小學校教員たらんと欲するに至る是實に止むを得ざることなり夫れ幼稚園を苟も教育系統の内に加へんには保姆の待遇と資格とを高からしむるは最も必要とする所なりとす仄に聞く文部省内學制に關する調査會を設けられ根本より我が邦の學制

を改革せられんとすと因て本會は茲に本會の決議に基き別項を具し及建議候也頓首再拜

五月十二日

大阪市保育會長

大村芳樹印

文部大臣久保田讓殿

（高等教育會議長宛も亦之に仝じ）

建議事項

一、幼稚園職員の待遇方を小學校教員と同一にせられたきこと

一、明治三十三年法律第六十三號市村立小學校教員國庫補助法中に市町村立幼稚園保姆を加へられたきこと

一、明治二十三年法律第九十號小學校教員退隱料及遺族扶助料法を公立幼稚園保姆に適用せられたきこと

一、幼稚園保姆の資格に關し小學校令施行規則第二百四條を左の通り改正せられたきこと

幼稚園に於て幼兒を保育する者を保姆とす

保姆は女子にして尋常小學校本科正教員の資格を有し保育上の經歷あるもの又は府縣知事の免許を得たるものたるべし

保姆の職務を助くるものを助手とす

助手は尋常小學校本科准教員の資格を有するもの又は府縣知事の免許を得たるものたるべし

一、小學校令施行規則第二百五條を左の通り改められたきこと

保姆の下に「助手」の二字を加ふること

以上

こういふ風で、一體、幼稚園事業は、關西の方が

餘程盛で、別して大阪が中心といふ風がある。どうか、東京の方も、今少し熱心になつて欲しいと思ふ。

尙、筆の序に、當市

慈惠院　のことを紹介しよう。これは佛敎主義の育兒院で、つまり、寄附金から出來て居る。場所は東區神崎町にあるのであるが、自分は多忙の爲めに親しく實地を參觀することの出來なかつたのは遺憾である。で、本院の目的は

世上の貧困無告の兒女を收容し、其兩親に代りて、養育は勿論普通敎育と手藝とを授け、獨立自營の良民たらしめ、希くは以て世の厄界物たらざらしめむことを期するにありと

其創立は、明治二十六年にありて、其以來收養の貧兒は合計百四十四人だとのこと、そして其院生の日課は次の如くである。

第一　院生は左の日課に從はしむ、但順番交替等は敎師に於て之を定む

一　毎日定時間手工若くば裁縫せしむ

二　屋內屋外の洒掃及炊事、洗濯等の雜用を爲さしむ

第二　就學生歸院したる時は復習せしむ

第三　晝間就學する院生復習したる後は凡そ三十分間休憩し手工若くは裁縫を爲さしむ

第四　幼稚生は午前二時乃至三時午後一時乃至二時幼稚園的方法に依り保育す

第五　土曜日は午後容儀を習はしむ但手工に從事し居るものは便宜夜間に於てするも妨げなし

第六　十歲未滿の院生は日曜日は隨意安養せしむ

之等の院兒、殊には貧家不良の子供のことゝて、其保育敎養上の苦心の一通りや二通りでないことも、大抵想像せられる、因に、此夏、堺市で、全國の孤兒院の敎師のために講習會が開かれるといふことを聞いた。

餘り長くなるから　大阪みやげは一先之で擱筆する。

（完）

二葉幼稚園

野口幽香子齋藤峯子兩氏の經營せられ居る同園は兩氏及同園保姆の熱心なる盡力の結果、追々好況に向ひつゝありとのこと、左に拔抄する同園報告に由りて、從來の狀況の概略を紹介すべし

現在の狀況

建物　家は相變らず去年の儘で狹くて、都合が惡くてとても、永くは續かぬと申ながら二年以上も辛抱致しました、私共の希望を申上げた結果種々御盡力下さつた方がありまして、今春以來非常に有望のお話が二度もありましたが、何れも望は達せずに終りました、併しこれからは益々熱心にさがしまして、いつかは喜ばしい新築の出來る日を待つて居ります、いつも〳〵願ふ事で御坐いますか適當の地所がありましたらどうか御周旋を願います

現在幼兒數及父母職業

幼兒數　五十名（男兒　二十八名　女兒　二十二名）

父親の職業

車夫	二十九人	疊職	一人
消防夫	三人	馬丁	一人
指物職	三人	魚賣	一人
小使	一人	菓物屋	一人
左官	一人	電氣工夫	一人
土方	一人	料理人	一人

大工　一人　　代書　一人
屠屋　一人

母親の内職

洗濯仕立物　四人　　巻煙草　二十二人
ほいづきや　一人　　髪結　一人
雑菓子や　一人　　紙屑や手傳　一人
教會の掃除人　一人　　縫箔　一人
幼稚園小使　一人

母親の職業（父なきもの又は私生兒）

髪結　家族四人　　洗濯、仕事　家族四人

幼兒及家庭の狀況

一、或子供の母親は精神病にて入院し、父親のみにて養育して居ります故幼稚園へよこして置く間は誠に安心して働くことが出來ると喜びます

二、或子供は母親が死にましたので、生れた時から全く父の手ばかりで育てました、其子が始めて來ました時にはどうしても座る事が出來ません、漸く座らせたかと思ふと直に足をなげ出しました、此子の父親が病氣になつて働けなかつた時は親も子も大層難義をして居つたそうです

それから特別に預けた貯金が卅錢許ありましたからそれを出して親子が四五日助かつたと申事です、爾後此親は毎日幾許かの貯金をかかさず賴むやうになりました、（別項貯金の處を御覽を願ひます）母親がないものですから着物はよく洗濯はしてありますが、如何にもひどいので、夏になつても單衣もないやうでしたから、皆樣から兼て頂いてあつた一つ身の單衣を少しなほして大きくしてやりましたら、其喜びましたこと、幼稚園から歸るとちやんと其もとの着物ときかへさせますそうです、父親が其子が可愛くて〳〵後妻をもらふ事が出來なんだそうです、ぼろをきてたべずに居ても其心は此樣に美しいのもあります。

三、或子供が餘りに蚤にさゝれて居りますので、一寸肩あげの下をあけますとピョン〳〵ととびます、それからすつかりとつてやりましたが五十一疋居りました。

四、子供の帶や襦袢には時々虱の居るのが見つかります、子供の蚤を見て居りますと『先生何見てるの虱ですか』と申ます。

五、中には家内中監獄に行かぬ者はないといふ家もあります『おとつさんは今監獄へいつてるの』など丶不審とも思はずいつて居る子供の前途實に哀れではありませぬか。

六、別項貯金の所に委しく書きますが、五十錢でも壹圓でもあると思ふと直にあてにします、此間も夜遲く尋ねて來た母親がありました、春以來の病人で誠に困るよい藥があるといふ故それを買ふ爲に貯金を出してくれと賴みます、いくらいるのかときけば七十錢あればよいと申ます又ある者は三十錢出してくれ、五十錢出せと又しても〳〵申て參ります。

病兒取扱　いつも變らず土手三番町の木澤敏先生に施療をして頂きます、御多忙の中殊に少なからずれ願い致す事余りに心苦しく、何とか工夫もと存じますがつい其儘になつて相變らず願つて居ります、或子供などはお藥の一ケ月も頂いたのもありますし、或時はおできの出來たもの、咳嗽の出るもの、など集めて先生がついて御診察を願ひ、大なき器にお藥を一ぱい頂いて來ておできにつけてやつた事もあります、誠に難有い事で、親と共に喜んで居ります、加藤照麿氏が或時一同を診察して下さつた事もあります其れ話に、定めて粗食

をして居るだらうにどうしてかくも丈夫なのか、貴族の子供などとても及ばぬと申されまして、一同に種痘をして下さいました。

子供が毎日顔を洗ふのや、耳の垢とり、爪きり、などはいつも通り致して居ります。

クリスマス　昨年のクリスマスも一昨年同樣非常の盛會で例により生田葵山先生にお話を願ひました、子供も殘らず參りましたし、親も姉も赤坊もふばあさんもといふ風に、忙がしい暮の日にもかまはずよく參りました、就學した子供も一二の外は參りまして、左なきだに狹い八疊二間に六疊の家、そこへ子供のお客が見える、寄附のお使も來れば寄附の贈物分配が始まる、それは家中一ぱいの人で、大騷ぎに騷げば騷ぐだけ私共は嬉しく過分の贈物にたまげてものもいへぬ子供の顔ながめて嬉しげなる　親の顔、あちこち見くらべては無限の感謝何たる嬉しい事かと幾度か涙をふきました。

三井家は此日の會にいつも非常の同情をよせられますが、此時もまたさまざまの贈物、一同にゴム毬と下駄とを贈り綿テルの切が親子の分をさらずに三尺ばかりづゝ贈りました、其外にお菓子の包古浴衣股引等の一くゝり、女兒は羽根に羽子板、男子は紙鳶に糸、とかやうの贈物どうして子供にはもてませぬ。

此催しが唯子供や親を喜ばせる許りではなく、學校にいつた子供と幼稚園との連絡を保つに大効ある事を見出しました、誰もかゝる有りがたい會に出ぬ人はありませぬ、年々就學兒の數は增しまして一年一度の召集が實は餘程困難の筈ですが、存

外よく集ります、これは永久に幼稚園と關係をたゝぬ樣にする唯一の方便であることを覺りまして喜んで居ります、なるべくならば五六月の候に今一度何とかよき方便もあらはと考へて居ります。三井家よりのお客樣が幼稚園の疊の餘りに破れて居るのを御覽になつて急に取りかへてやらうとの事、同家の疊がへと同時すつかり新しくして下さいました、幼稚園は一時見違へる程奇麗になりました。

親の會　これは時々致します、時間など定められませぬから夕方と申して置きます、と幼稚園へ來る子供を片手にひつぱつて、背には必ず赤坊をおぶつて居ります、どうしてかくも子供が多いかといつも私は驚きます、此間など暑いのに狹い處へいつぱいになります、幼稚園へ來る者だけ一方に集めて歌でもうたはせて、やがて靜にさせて置きましては少しづゝ話を致します、此又話が實にむつかしいので、私共の普通用ひます樣な言葉では少しもわかりません、私は其爲に余程苦心致しました此頃は大分私のいふ事が皆にわかる樣になつたと申事、或時の事私が皆に貯金をすゝめまして貯金の効を說きました、皆はい〳〵ときいて居りましたからわかつた事と思ふて居りますれば翌日になつて小使に申すには貯金〳〵とおつしやるがいつ体貯金て何の事かと申ましたそうで、一晩の話も全く無であつた事がわかりがつかり致しました、併しまさか皆がからではありませんが。五月のお幟や人形の大層いゝのを頂きまして毎年飾りますが、今年の五月の事、或母親は子供の迎に參りまして、床の間に飾つてあるりつぱな飾物

を見まして、先生のお子さんのか、又は小使の子供のかと、問ひますから、あれは幼稚園の子供皆の爲であると答へました、處が母親は涙を流して幼稚園はかくまで親切か、我子の幸運を祈る爲にかゝる用意迄してくれるかと感謝の涙禁じ得なかつたそうです、かくもこちらでは思ひもつかぬ事を喜んでくれるかと思ふと、親切に訪問してやると先生はあらを探しに來るといやがる者もあり誠に階級の異る社會の事情の互に通ぜぬは致し方ないとは申ながら、私共の研究の足らぬ事を毎度感じて居ります。

幼兒の貯金　これは前の報告にも書きました通り五厘づゝ義務貯金をさせます、其代り保育料を五厘に致しまして親の負擔は初の通り毎日壹錢、處が段々勸誘の結果右以外に一錢或は貳錢多きは毎日五錢づゝ持つて參つて切手の貯金を致します。當年就學の幼兒の貯金は退園の時出して大抵は學用品に費いました、尙貯金の臺帳は本人に渡しまして今後引續き少しづゝでも貯金する樣にと申ましたが、渡してしまへば一回にせぬ樣で、三十錢五十錢と殘つて居るのを何とかかとか申て全部拂戻の請求に參ります、一ヶ年間の貯金額を試に書いて見ませう。

義務貯金毎日五厘づゝ

貳十七圓九十五錢　五十人分

最大額一人壹圓貳十四錢

最少額一人十錢（これは新入の子供）

特別貯金（親の隨意に持つて來る分）

十四圓三十五錢　十九人分

夏休廢止の結果及本年の計畫　本園の子供は大き

くなる程悪くなり、休があれば又悪くなります、これは全く家庭のよからぬ爲なので、隨分憂ふべき事でありますが、出來るだけそれを防ぎたいと思ひまして、昨年は夏休廢止を計畫致しました、もとより同じ先生では續きませぬから、外に特志の方を頼みましたが、其結果先生の手加減の變りました爲、子供が喜んで參りません、九月から平常の樣に復しましても、尙喜ばぬ者もあったり等致しまして、休中に子供が悪くなるのは同じ樣に感じました、それでする方では隨分骨も折れ、いろ〳〵計畫も致しましたが、かゝる有樣でしたので本年は又趣向を變へました、それはお休は三週間に致しまして、今迄の先生が代りあつて休を取り、他に助手の方を頼みまして、毎日十二時頃から四時半迄として見ました、子供の家は非常に暑くもあり狹くて不潔ですから、日中の暑い盛りを幼稚園で、比較的涼しい廣い處で遊ばせて置いたら多分子供の身体の爲にもよからうかといふ考です、先づこれで試みましていけませぬ樣なら又工夫致します。

希望　毎年々々同じ希望を繰返します、早く新希望を抱く樣になればよろしいがまだ〳〵家の出來ませぬ内は外の事へは手を出しません、どうか四谷赤坂牛込邊で貧民の多い地方に二三百坪の地所がほしいのです、やすい貸地が何かでよろしいのです、どうぞ御記憶置き下さつて御盡力を願ひます。

寄附に對する希望　何か新に調へて御寄附下さる方は、少しでもお金の方がよろしいのです、もしふわり合せ等、又御不用品などならば何にもて頂

きます、年末クリスマスにはいつも衣類を與へますから、子供の浴衣襦袢股引シャツ足袋靴下下駄等は誠に結構です、大人の物でもよろしい、それ〳〵よい樣に致します、狀袋はこれ迄外側をとりて中ざけを頂きましたが、近頃は外側の紙を鼻ふきに用ひますので、古きもの其儘に頂くのが尙よろしい樣になりました、子供に內外をわけさせまして使ひますから、だん〳〵種々と工夫の出來る物で御座います、右の外れ辨當箱傘のふる物硯筆墨鉛筆石筆どんな物でもいらぬ物はありませぬ、御寄附下されたい方は私共の自宅でも幼稚園でもよろしいからお屆け下さらば誠に有りがたく、もしお序がない時はおはがきでも給はらば序にとりにさし上ます。

新刊

すみれ

小形の可愛らしい美文雜誌で、甲府市魚町のすみれ會といふ床しい會から出る、地方の雜誌としては、まことにあかぬけのした、見た所、一寸ハイカラ風の雜誌で、中は美しい新體詩や、新派の和歌や、美文で滿ちて居る、夫に所々に可愛い挿繪のあるのは殊更嬉しい、この道の友として珍らしく立派なものです（定價十錢月一回）

夜も漸く長くなり候、虫の聲を聞きつゝ、燈火に對して播くには以てこいの時節と相なり候。次號よりは、精々新刊を御紹介可致と存候、敬具

會報

入會

麴町區元園町一ノ二七　長澤さく　右紹介野村すき

宮城縣仙臺市柳町三十九　圧司なか　右紹介立花せん

淺草區松清町四德風幼稚園代表者　稻垣實秀　右紹介和田くら

宮城縣仙臺市北五番町十九　片山きわ　右紹介立花せん

宮城縣末無掃部町十二　中村しん　右紹介立花せん

宮城縣宮城宮城郡原ノ町小田原三十九　菅野きしい

本所區南二葉町十二
京都市上京區室町御池下ル福寺町
長野縣高井郡中野町
千葉縣山武郡瑞穗村萱野
女子高等師範學校
女子高等師範學校寄宿舍
仝
仝
東京市番町小學校々長

右紹介立花せん　高瀨菊次郎
右紹介東基吉　上々手芳
右紹介松村久　黑岩ぬい
右事務所申込　前田幸作
右事務所申込　竹島茂郎
右紹介下田鶴　鈴木やう
尾村あい
常川とよ
右紹介岩田ゆき　小野義倫
右紹介大橋いぬ

改正

岸高改　平木たき
淺田改　横尾しづ

轉居

神田區仲猿樂町十一　小笠原しげを
東京市本郷區西片町一〇ノとノ四號　松岡幸
大分縣大分郡大分町富田武馬內　矢野かつ
小石川區久堅町七十四第五十四號末永健吉方　平岩繁治
兵庫縣明石女子師範學校　中澤よし
三重縣四日市市四日市幼稚園　關すが
牛込區市ヶ谷富久町八十四　相馬宗孝
岡山縣岡山市東田町十八番地へ　柴田照子

本郷區元町一丁目十二番地　松島八重
本郷區彌生町三番地ほノ三號　藤並京
本郷區曙町十六番地　西村さだ
大阪市東區大手通一ノ九八　上總亨
宮城縣仙臺市元常盤町九番地　島ツネ
青山原宿五十八番地伊藤方　野村ぎん

會費領收

自明治三十七年九月九日至仝九月

金額	年月日	姓名
六〇	三七、七—三七、一二	御園生よそ
六〇	三八、二—三八、七	拔山つぎ
一〇〇	三六、一二—三七、九	久保やま
五〇	三七、九—三八、一	圧司なか
六〇	三七、七—三七、一二	武藤うめ
一〇〇	三七、四—三八、一	馬場虎
一二〇	三七、一二—三八、一一	上總亨
一〇〇	三六、三—三六、一二	木村良
一〇〇	三七、二—三七、一一	依岡愛
一〇〇	三七、八—三八、五	櫻山滿
一一〇	三六、九—三七、七	奥井シケ
三〇	三七、八—三七、一〇	伊東國三
一〇〇	三七、四—三八、一	柳澤てう
五〇	三七、九—三八、一	片山きわ
四〇	三七、九—三七、一二	中村しん
四〇	三七、九—三七、一二	皆野きしい
三〇	三七、一〇—三七、一二	原ちかじ
六〇	三七、七—三七、一二	村尾まさ
六〇	三七、七—三七、一二	高橋しげ

石津まつよ	三七、三—三八、二	一二〇
黒岩ぬい	三七、九—三七、一一	三〇
芳賀きぬ	三七、二—三八、九	二〇〇
鈴木はるえ	三六、一〇—三七、七	一〇〇
兒玉いと	三七、九—三八、一	五〇
奥田織衛	三七、八—三七、一二	五〇
伊庭なほ	三六、一一—三七、四	六〇
木村菟枝	三七、九—三八、一	五〇
安藤さつ	三六、九—三七、二	六〇
坂根かず	三七、八—三八、七	一二〇
司馬のぶ	三七、四—三八、三	一二〇
上々手よし	三七、九—三七、一二	四〇
福田よね	三七、八—三七、一二	五〇
伊藤トヨ	三七、四—三八、三	一二〇
太田タメ	三七、四—三八、三	一二〇
飯野ふみ	三七、一—三七、一二	一二〇
森岡たか	三七、四—三八、一一	二〇〇
木下やす	三六、一二—三八、七	二〇〇
土保かん	三七、八—三七、一二	五〇
森緣子	三六、一二—三七、九	一〇〇
佐原貞子	三五、五—三六、二	一〇〇
林玉子	三七、八—三八、七	一二〇
酒井たね	三七、七—三七、九	三〇
渡邊のふわ	三七、七—三七、九	三〇
藤谷いき	三七、七—三七、九	三〇
岩田きき	三七、七—三七、九	三〇
内田たね	三七、七—三七、九	三〇
益田一枝	三七、七—三七、九	三〇
三輪もと	三七、六—三七、八	三〇
井村しげ代	三七、六—三七、八	三〇

山本るい	三七、六—三七、八	三〇
田淵みすゞ	三七、二—三七、四	三〇
山下ふさ	三七、七—三七、九	三〇
土方ひさ	三七、七—三七、九	三〇
藤井とよ	二七、七—三七、九	三〇
田副つる	三七、七—三七、九	三〇
鈴木ぎん	三七、七—三七、九	三〇
牧あさを	三七、七—三七、九	三〇
齋藤能婦	三七、六—三七、八	三〇
高松幾代	三七、六—三七、八	三〇
鳥居飯三郎	三七、七—三七、八	二〇
神田順	三七、七—三七、八	二〇
谷田部じゅん	三七、七—三七、八	二〇
町田則文	三七、七—三七、八	二〇
西島富壽	三七、七—三七、八	二〇
伊藤弘一	三七、七—三七、八	二〇
大羽ひさ	三七、七—三七、八	二〇
南摩てま	三七、七—三七、八	二〇
矢作てつ	三七、七—三七、八	二〇
後閑菊野	三七、七—三七、八	二〇
今立谿	三七、七—三七、八	二〇
伊藤成	三七、七—三七、八	二〇
森岩太郎	三七、五—三七、八	四〇
横山榮次	三七、五—三七、八	四〇
山越忍空	三七、四—三八、三	一二〇
岩下なほ	三六、一—三六、一二	一二〇
前田幸作	三七、九—三七、一一	三〇
原須賀	三七、五—三八、二	一〇〇
池田嘉代	三七、五—三八、二	一〇〇

（以下次號）

（婦人と子ども第四卷第十號）
（明治三十七年十月五日發行（毎月一回五日發行）

明治三十四年二月六日內務省許可
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

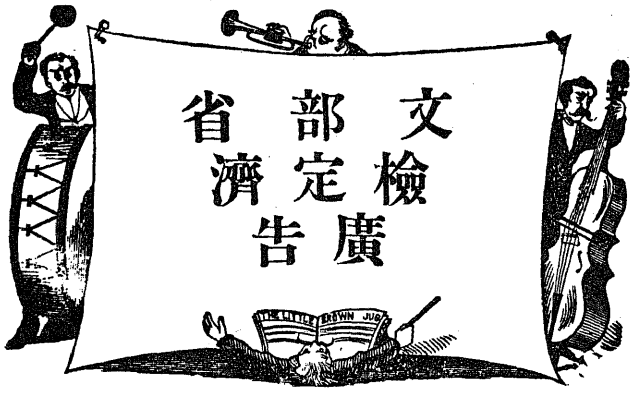
◎◎空前の唱歌良教科書！
◎檢定濟生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定濟

唱歌教科書

教師用 全四冊
生徒用 全四冊

郵稅一冊に就き金四錢

第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢
第三卷定價金三十錢
第四卷定價金三十錢
第一卷定價金十五錢
第二卷定價金十錢
第三卷定價金十八錢
第四卷定價金十八錢



發行以來唯一の完全なる唱歌教科用書として非常なる大喝采を博し僅々數月間に三版發行の盛運に會したる本書は今回其生徒用教師用共に文部省の檢定を經て更に其眞價を發揮す

●洋琴　金參百圓以上貳千圓迄　各種

●ヴァイオリン　鈴木製舶來品　金五圓以上五拾圓迄八圓以上百五拾圓迄　各種

●樂隊用樂器　大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

●鼓隊用樂器　太鼓金貳拾圓以上　横笛金壹圓以上　○學校用一組拾參圓

●手風琴　金貳圓五拾錢以上參拾圓迄　各種

●附保險山葉風琴　定價金拾六圓五拾錢以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジョーレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

●ピアノ、オルガン調律修繕

●郵券貳錢御送附目錄進呈

東京市京橋區竹川町十三番地　共益商社樂器店
（電信略號ヨキ）
電話新橋五百廿九番